

第1巻の「本部事情」における「道」②

前回は、『おさしづ改修版』第1巻の「本部事情」の「おさしづ」において、「道」という言葉が用いられる場面を割書によって整理した。それによると、教会本部の地所や普請および別席に関する場面で、特に具体的な伺いに対して具体的なお諭しのある場合にはあまり「道」は用いられておらず、それに比べて、教会本部の設置に関する場面では「道」の用例が多くあることを確認した。そして、教会本部設置の頃から「刻限のおさしづ」において「世界の道」と「神の道」を対比した論しが増えている、と述べた。今回は、実際に同じような論しが、教会本部設置の場面で多く現れていることを確認したい。

教会本部設置

教会本部の設置に関する「おさしづ」をいくつか挙げると、次のようなものがある。

○どんな道も連れて通る

(明治21年3月9日(陰暦正月二十七日)陰暦正月二十六日、教祖の一周年祭式の際に警官出張して、……翌二十七日伺) さあへへ難しへへ道や。……難しいと言えば難しい。どんな道も連れて通ってある。

(同日 天理教会設立の伺)

五十年前よりある。無いへへという処から付いて来てあるもの。どんな道も連れて通ろう。一つ理も立てよへ。……一つの所に日々一つの道を付けようと思う。一つ道も連れて通る。

(同日 又、教会設立を運ぶに付心得)

渡る川も渡る、連れて通る道も通る。誰々とも言わん。これへへという者寄って運んでみるがよかろうと。元々の思案、神の道というものは、よう聞いて置かねばならんへ。

(明治21年3月11日 清水與之助、諸井國三郎の兩人、教会本部設置願の件に付東京行願)

世界のため定め一つ運ぶへ。天然自然いかなる道、どうい道も連れて通ろう、早くの道も連れて通ろう。幾重の道も連れて通る。

(明治21年3月13日 東京へ諸井國三郎、清水與之助 出立の願)

難しい道、よう思うて見よ。危ない道を通れば、通りよいようでも通り難い。一寸いかん。さあへへどのよの道も連れて通るでへ。

※明治21年4月10日、東京府より教会設置認可

○世界の道／神(一条)の道

(明治21年4月26日 松村吉太郎東京に於て滞在の儀如何致すべきや願)

一寸の細いへへ道や。未だへへ細い道からだんへへ始め。……世上の処はこれでよいのや。神一条は五十年前から付けた道や。

(明治21年6月23日 ぢばに於て分教会所設置の件伺)

どうでもこうでも皆伝え、それへへ皆心、世界の道は、神の道とは皆間違うてある。天然自然道で成り立つ。世界の道、通る通られん、一寸許し、その日来たる処、世界の理を運ぶ。

前々伝え神一条を胸に治め、世界の道運ぶがよい。

(明治21年7月11日 本部をおぢばへ移転するに付、奈良県庁へ届書にして宜しきや、又、願にして宜しきや伺) 神一条の道聞き分けてくれ。何でも無い處からだんへへ道を付けて来てある処、前々より皆伝えてある。そこで往還道は通り難い、細い道は通りよい。……この度皆世界から押されるから、一寸細い道を許したもの。どうでもこうでも、一つの道通らにゃならん。

(明治21年7月23日 東京より届書の添書帰りて願) 何処へ頼むやないと言うてある。軽きへへ道許したる処、神一条の道はなかへへ分からんへ。かんろうだいの道は分かつまい。世上にては世上の道を知らそ。世上で矢来をしたようなものや。

(明治21年11月21日 教会本部開筵式三日のつとめ 致しますものか、又は一日だけ致しまして宜しきや伺) 皆世界応法の理へへ理を以てこれ一段で済むと思うなよ。未だへへ神の道がある。さあへへどうせこうせは言わんへ。神一条の道は、もう一段二段の理があるへ。

このように用例を挙げると、明治21年(1888)4月10日に東京府より教会設置の認可が下りる前と後では、説かれる内容が大きく異なっていることが分かる。明治21年3月9日(陰暦正月二十七日)の「おさしづ」は、東京での教会設置の動きが本格化する直接のきっかけとなる伺いである。天理教会を設立することについて伺ったところ、「どんな道も連れて通ろう」との言葉をもって許されている。それから数日間、教会の設置認可のために東京に人を派遣するなどの伺いや願いが連続しているが、それらの「おさしづ」においても、「どうい道も連れて通ろう」などと、認可に向けて動いている当時の人々を後押しするような論しがなされている。ただし、このようにどんな道も連れて通るとはいわれるものの、3月9日の「教会設立を運ぶに付心得」という伺いに対して、「元々の思案、神の道というものは、よう聞いて置かねばならん」と、心の置き所を論されていることは注目に値するであろう。

だが、教会の設置が認可されてからは、大きく分けて2通りの「道」を対比した論しが頻繁に見られるようになる。それは、一方は「世界の道」であり、他方は「神(一条)の道」である。「世界の道」は「世上の道」や「一寸細い道」あるいは「軽きへへ道」などとも言い換えられ、世上で矢来(やらい:木や竹で作った仮の囲い)をしたようなものだと説明される。文脈から見て、これは認可されたばかりの教会本部を指している。それに対して、「神(一条)の道」については、「かんろうだいの道」あるいは「五十年前から付けた道」などと説明され、教祖が「月日のやしろ」と定まられて以来ずっと続いてきた道であると言われている。そして、「世界の道は、神の道とは皆間違うてある」、あるいは、「世界の道、通る通られん」とも言われているが、教祖が50年以前から年限かけて付けられた「神(一条)の道」を聞き分け胸に治めて、教会としての歩みを進めるよう何度も説かれている。